僕が飼う

本田楽

ある朝のこと、僕は豚と見つめあっていた。いや正確にいうと僕が一方的に見つめていただけなのだろう。その目は方向こそ僕のほうを見つめていたが、僕のことは見ていなかった。一心不乱に横腹から背中のあたりを壁にこすりつけていた。体がかゆかったのである。その眼光はまるで僕たちが電話の最中に偶然手元にあったペンで書いた時の無意味な落書きのそれと同じだった。それなのにその眼光はいるように鋭い。これがこの子の生来の顔つきなのだろうか。その後もしばらく体をこすっていたので体を掻いてやることにした。はじめは少し警戒したものの掻き始めるとすぐにお腹を見せリラックスの状態に入った。5分ほど書いたところでその豚は「もう十分」とでも言いたげな顔でその場を離れた。豚舎での朝の仕事はもう終わっていたし、戸締りをして僕も豚舎を後にした。

　僕が養豚部に入ったのは動物が好きで、肉を食べることが好きだったからである。そこにそれ以外の理由はなかったし、「気持ち」はあったが「志」であったかといわれてみれば答えに詰まるところがあっただろう。入部当時にそんな自分に疑問を抱くこともなく、「養豚部員」としての仕事をこなすことが僕の日常だった。

　それは2年生の冬のことだった。その大分前から僕は環境問題といわれている事について学び始めていた。自分の社会などに対しての盲目さに嫌気がさしていたし、有機農業を学ぶ高校で2年を過ごして板のだから必然といえば必然だったのだと思う。その日僕は環境のことを話し合う集まりにいた。そこであるテーマの映像を見た。「工業的畜産」。その内容は濃いというより、「苦い」ものだった。その名前の通りその映像の中の家畜たちは工業的に「商品」として扱われていた。狭い空間で大量に飼われており身動きの取れない環境で一生を終える家畜も珍しくなく、窓がなく光を見ることのできない豚も大勢いた。そしてさらなる苦しみだったのは工業的畜産は「環境問題」にも大きな影響を与えているということだった。

　工業的畜産に限った話ではないが畜産は家畜を飼育しているので大量の飼料と水を必要とする。例を挙げると豚肉1キロの生産には穀物5キロ水4900リットルを消費するのだ。しかもそれらの穀物は大量の殺虫剤、化学肥料、農薬などのものを使用して生産されることがほとんどで、これが環境に悪影響を与えているということは言うまでもない事実だったのである。

その工業的畜産の映像を見てから自分の「畜産」や「命」に対しての視点について悩んでばかりの日々だった。自分の今までの豚たちに対しての行動は正しかったのだろうか。この豚たちにとって何がより良いのか。そもそも命を奪って食べることの意味とは。倫理的な部分での自分との葛藤に日々の生活の色が変化していく毎日だった。季節は飛んで3年生の5月。私は電車に乗り京都へ行っていた。自分の生き方などを考えたとき「サステイナブル」な暮らしがしたいと思った。そのためには有機農業の実践的な学びは不可欠だと思い、農家実習に行くことに決めたのである。行った農家では養鶏、野菜、作物での経営を営んでいた。養豚は営んではいなかった。僕自身が養豚の農家を選ばなかったのだ。あの映像を見た後からの自分の将来像にどうしても養豚家というビジョンが浮かばなかった。いずれは肉を食べない生活でもとまで思い始めていたのである。この時僕はある意味「思考停止」の状態であったともいえるだろう。

それから実習が始まりなるべく多くのことを吸収しようとしていたので最初の一日からすぐに時間が経つようになっていた。その分充実しているということは改めて考えなくても無意識的に分かることだったのであえてその気持ちは反芻せず心の中で放置させていた。

　2日目の昼。食卓に並んだ料理たちは作業終わりだったこともあり、より輝いて見えた。農家先のご飯はいつもおいしいし、農業という営みの原点に立ち返ることができるので好きだ。その日の料理もどれもすごく美味しかった。だがその中でも一番魅かれたのは豚の角煮だった。自分に嘘はつけないとはよく言うが、まさにその通りだと思った「肉を食べない生活でも」と大口をたたいていたのにも関わらず「肉を食べない」という覚悟はまるでなかったのである。自分の中の矛盾を知る瞬間はあっけなく訪れた。

　農家実習を終え学校に帰った来た後の豚舎で考えた。もしこのまま肉を食べ続けるとして何も責任を持たない消費者として生きていくのかと自問した。どんな飼育環境にいたかもわからない家畜の肉で自分を形作ることは、「持続可能」なのだろうか。僕は「命」にマヒした生き方はもうしたくなかった。それならばどうすればいいのか。停止していた思考がまた動き出したとき、それはやっと浮かんできた。

　「家畜と共生できる環境を作る」

いずれは奪ういのちにできる限りの敬意を示すのはこの方法が最善なのではないか。何より自分の一部になる子たちと一緒に生きたいと思ったし今目の前にいる子豚たちも半年後にはいないのだ。僕たちの血となり肉となる。その命の記憶を自分に刻みながら歩んでいける。そんな場所を自分はつくりたいのだと分かった。だがなぜだろうか。自分にとって大切なことを理解するのは豚舎にいる時が多いような気がする。僕にとって豚舎という場所は想像以上に大事な存在だったのだろう。そう思いながら閉めた豚舎のトビラはいつもとは何かが違っていた。

　それからは悩むことはあってもそれはどこか心地いい悩みだった。自分の進むビジョンが明確に見えたからだろう。そのどれもが自分の糧になっている実感があった。そもそもこの学校に来てからの悩みはどれも自分を成長させるものだったのである。今思うとここに来てよかったと強く思う。一生の友と出会い自分のアイデンティティーを見つけることもできた。何より「農業」と出会えた。自分に嘘をつけないものを見つけたのである。もう卒業のようになっているが、卒業まではまだ9か月ほど残っている。僕はこの時を胸を張って歩めるように、いずれ出あうあの子たちになんて言えるか。「僕が飼う」か。いや違う。僕に言えることはたった一つ。

『共に生きる』だ。

ご清聴ありがとうございました。

２５８１字